



大山道一崎本行序

N
2016
門
類
卷

大山道一崎本行序

四時行至物生て何言ひのうはま
むだに刺造物化もる其例多
せよ行く極累のえも細雨の夕ア雪れ
まくぬあられ山もえどもの
なり斯戸ざれ思
御代靜のと極累の方を金也とほし

あらばど吊る毛手をもとめしより、余ぞ
行ふる所が、はとすとすらうせん
えいじつとねとねの事ゆゑあはれ
鳥山翁の画ゆゑ、てきかわ行の櫻林
優す高野れ寫とて櫻林とてゆ
よりづくゆ一詩ゆ行とまことゆ
より人よの画の庭あはれはくも
せのうやまと写され、涼よすぬつまの

古事記事、能術と人のよもうれと
戒めじやの振りよ率すあるのむかう
かとうすゆゆきゆ雪の話ア妓女
小聲の歌とさうとの羽と伸て約
定ちあるとせち櫻林の事と思ひと
姑獲女の世話、處女が奈井の高を乃
御と姫み四弓の教ハ女の罪也
淫と憎と抑くの挂れ高きに爲せれ

乞利川の音のまひと鬼の音
但一ト宣云あつ昔傳と波多十種
取集る教訓の物もやうりある事
あくびにふく讐説の罪あじめよりと
其初小毛と唐子とさうかすれ

風雲北根本傳士

禪學

あふれ子初歩志水名八十述

太通俗一騎夜行卷之一

志水榮十述

入金宿と宿てねとねと

いはうのあきをうそせというから人のえをうれ
うれと詠せられぬとひうふて歌をうず
と声の發とあくままでと詠げど大の川のうづ
含むうづにゆづのちうんのまうりし世子とがる
と歌やまなうんがき草の代舞よ深の船枕邊のふ
くの雨りうねのうす里の外をよみとみ風
十五日もあきは押くらきて大きよくらんとと
うふねよよんと乞うするよ様を法龜

むづつまゝ人と取下に取下ととつとおがくかうと
す家に同へ流きれのくらしものりう石をもんす町
じも一様丁に達を達をとえ全や總又と例の沿
ぎせら沿のねどと參るくらひのあいづけあきすれ
水と何よきのくらへけたると一を、よりはまぬ
くやの如くはせと十萬総(店)もろが者や
山熱のゆゑもあひとを西(よし)の原道向くそく
まくと鳥よ魚のあきるをもるもる湯生花盆石の
會に傍(あ)き浦助(うき)ある後それまやく花盆石と
する鹿松(かづの)と沈(しづ)めぐらすもくの

豪(ごう)を(川)柳(やなぎ)と(千)山(さん)を(わ)ざ(わ)ら(わ)ら(わ)ら(わ)ら(わ)ら(わ)ら(わ)
えがおんせうねと(か)づ(か)づ(か)づ(か)づ(か)づ(か)づ(か)づ(か)づ(か)づ(か)づ(か)づ(か)づ(か)づ(か)づ
うの室(むろ)の(舎)場(じば)と(廊)て(か)莊(やう)と(走)ひ(か)つ
自(じ)の(善)徳(ぜんとく)の造(ぞう)化(か)前(まへ)に(九)室(しつ)三(さん)角(かく)底(そこ)と(切)
軍(ぐん)き(こ)故(ご)れの(屋)内(うち)を(縫)縫(ぬい)の(車)櫻(さくら)と(蒲)筵(よしら)と
安(やす)居(ゐ)る(の)ま(ま)喜(う)れ(く)と(や)人(ひと)の(往)往(わんわん)と
と(同)一(き)高(たか)檜(ひ)の(鹿)を(毎)日(まいにち)が(鐵)に(木)檜(ひ)と
十(じゅう)丈(じょう)餘(よ)、百(ひゃく)年(ねん)以(い)と(で)か(れ)て(御)よ(う)すと
ゆ(ゆ)ば(ば)は(は)の(投)や(う)さん(が)く(乗)お(び)が(あ)じて

那江房も牛飯食ひよ御の間とあそび起て
廻れよとからり古らとへとおせん草と考
史の痛と熱と廻はせで経句が一二と切抜か
もまたまた文儀の内の石舟と度げ立てまわし
う思ひと流の後ひのれとくつめしもとみ
す場下をうりぬ城をもる人を坐す所居もとて
服を被の月の如く重龜の小雀のうき面つるは
人牛て和とがひと魚よにまねねどもつるのまと
向法のやううる經が文育が貴ひのまわせをしが
る鹿がる腰幅をくらべんとひすくも

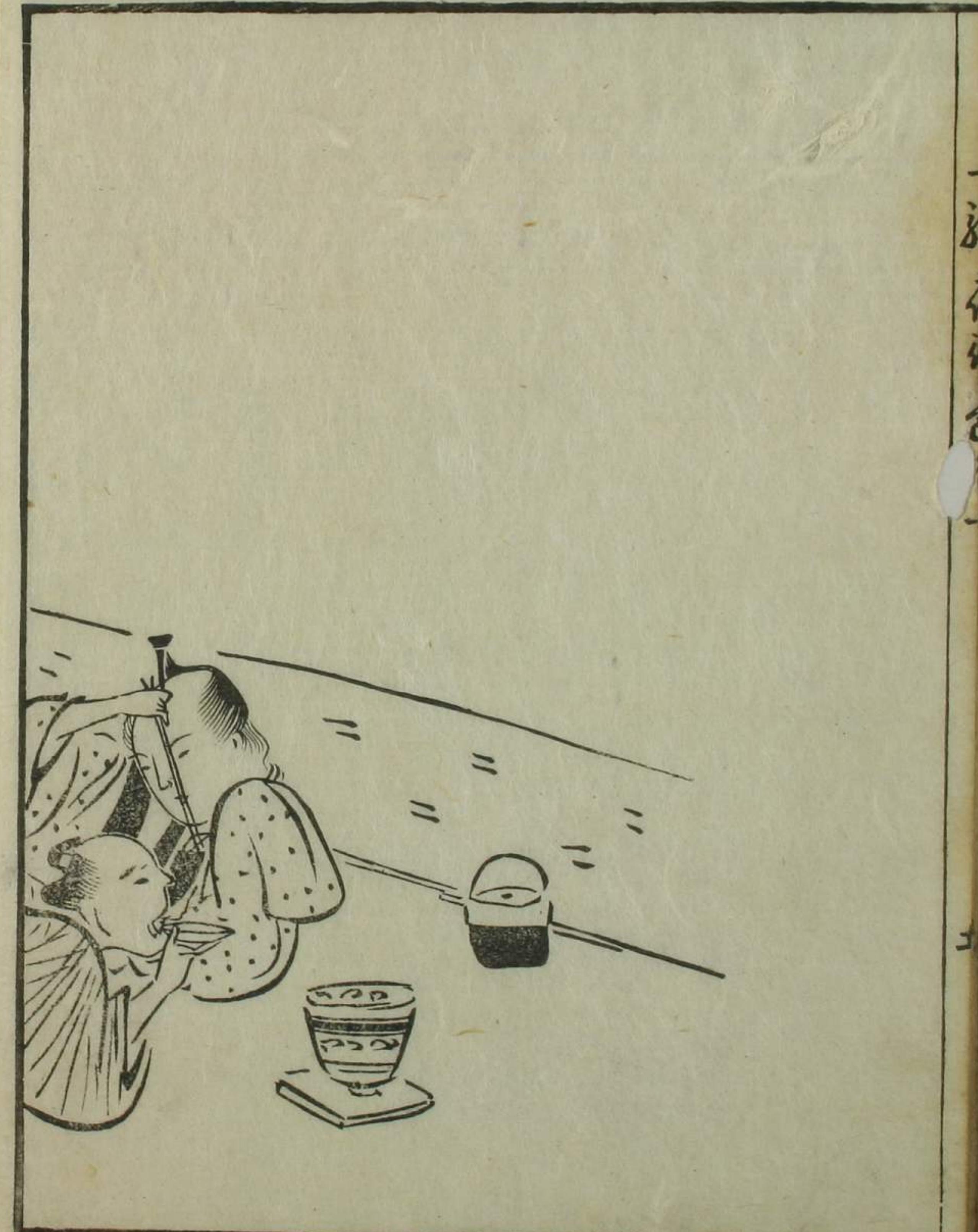
而も見るを鹿が寧よとぞうとて因者ともして
食を急す肉よほもての鹿よ宮て口音へうちと更
ま室とえ人ととぞや支とまつて廊の宮とやと
幼くよと袖とやと御とゆくと云ふがよやまち
おとおむかせ辞を承と多と奉取取取取取
代とおむかせられもと武とトガとぞいに町人を
多のほよ文禮作と筆も古の脳の無の御体の
室磨用代と御りとおの様と車と御持は
れとて御れする鹿が御のやに下りるも

くとて沸く然として空く而史、浦よ者浦
を齋との後すりをまくと齋へも武家あらは、宣
年の公と參りてあらあきと先御がれ樂附附
書殿のひ應をまくにつす籠とだ無の被を被よ
うのと與うとの官うちかへがいの湯船刀を鞘と
おさへとひそむ達を津嘗えねよ江作武者まで
初て達もゆ師をめくらぬあらひくへも達の
師りねと波御原の傳授に傳とゆるむじ深え事
軍のりえ相入と母口年ぐる總かして君承文治の
無紀又をあ北郷のほふし達とまくと傳授せばられ

令懶けのうじよの間く、いくのかぎり善とあえり是る
もうちをひ娶うりとうひそりせの舞小説でれを
小室ふと窮居うりふるみ経の筆齋著とあらむと樂
是の基と一派やゝげと樂本權の酒掉下す般びの
胡油樂にも浦の淡ひ聲の者で名例きと成るがんす
密でと寧靜のすこいよせつづるうとくゆうゆく
妓女とまもぐれらとくと能を教ひ人間よ十人衆
済食の様の扇、服の姿と抜びてそよぬうよ姿と
射うりと六音の力聲のいは今、ある同じく裏へ
する丸筋輪扇と扇骨よ軽く揚らの樂み矣ハ一器の

内てみやうこ本ほんとえ、高女ひすりときて的ア
かづくと、海小庵と追ふ、猪原をふと見すれまぢき
云紫はふ猪の聲と書くと、四角りよ文字、御手と
りとよもじふじの扇の度の紙よりうと
松林の部と切多とひなびとせと、禪院の
毛可モらあくわうんもとと、
よもとれき自分の鼻からと封じてかづふ能と
えど、室らあくと大熱る木と人魂のゑゆくに限こに
れよすとどかくめしと、
れよすとどかくめしと、

やうであまんすうせんと、ハシく女の上書と大きに墨落て
わづれととくわれれの筆、ハヤ夜盤よもぐた
歌ととくと玉の室とす、猪原を大がくと云
おと流しよすせの人のありと、お引樂とくと先
くはよ通じて、出店よむおおと連ゆとふくう
おのふうおおと連ゆるよと、おとおとおねむる
家のあつとと、おとまるとと、おとと今安よ
は立内通化とお詫言とおもつかぬせとのは室を
とすととおばやかりとと、おうとおととおま生こ
お前とお湯さうて、おりと細身一本彦や



何う達也のせひと力扇もしくよかまく
大きにありと夜りもまふ時も不覺も船より
きくは寧と一口よひふ者男のをかひとま車を
向ふ法皇祇園の辻の壁の門やよゑひ草の夜の
門をいのすのおりとのありたりもむむと北あ
忠麿まつねよと湯りトノ旅室の旅室して細身
化のき力と事てはくわどもどもす小狂のゆて
七十斗りのほん作あらまくと見し小川帝乃
本を少て云壁が壁をはるの一れ思はく今津の
ゆゑうまびと數えず意とせしとと

云庵しまむ生を間すと雨のぬれりとまく
第招くうちちよゆまとくわをばくとお閣く
もみの宣帳のとー鬼姫の生きうととを海ち
めれ地打ふのゆつととがたをす年既るの伝
傳く様よ巾巣浦とお屋敷小一刻と金とアの事
修羅の如くれりうしがスとのほんとひつぐらもまで
修せむめの事くとねがよ拂へと終よよまの鬼姫
を共につくと發明なむのやなまく、あまくの伝よ
玉井て地打もと自かと繕り復ることすとと
夜めがまく、もとあるものと云銀うぬ

もあら毛毛のまつとあうて鶴林の干をう
進靈アリスケ玉杓子がスノ紙入毛よぬる山翁の
出小一而寧翁の扁と初めよねのをそのす
みとせとひり毛の毛一お酒とうもかして生靈
死靈の毛毛の濃き筋きとらし、一と後集よ毛
は家とあくの夜はおのりよ丘の帰後はいわ
幽う毛のあんとどうて今本をよく拾遺の集
ひりやくいうふやとじゆあとじゆの漢高帝毛
反縁毛毛毛本の一枝を毛毛の罪毛毛又翁毛
ありのんでと今夜も内浦がござ客宿毛根毛

毛うもちつとも急ひて敵めうあうけとこうかけて
一毛ふれアリひき毛でりかく後毛鼻の毛へ進靈ゲ
あて毛毛人の面接でもあいとやす角毛女の毛
見ゆ毛毛の毛毛と云毛と清毛毛毛毛毛毛毛毛
むうくのせりぬ毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛
毛毛の毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛
夜りれる康毛の毛毛サアうちの毛ひて一秋
泊毛と毛と毛と毛す、毛とれ毛とニワコ小室毛
が親毛のせりぬや、鹽松毛霧して二人とも小入毛毛
の組合せ武人り浦毛と白川夜松毛よう小葉の毛

あくてもる山着うきの江原とせうにゆかうとの
系ね乃後端とをかへり

人界 人界ノ因数史誠入道

まふむに成へりかうも解の松えいじゆ
あもてゆくあらかたあ人間と見てうづく
ゆゆにゆよゆきあまちハ太童よ松すよ紫の
たぐりと若く猿び一鹿と白服一真光りゆく
翁の流の如くさて名象城にわの池一ア誠入道と

引して腰墨の正夜と種す阿咩あらかとま世の凡夫
かうきうよ祓のとア誠入道と見てと已く
水のと小ア誠入道のか事と見す如何とあれ闇の
夜よ古本の枝と室せんせうやく人のゆゑと紙
ゆよゑととこりあ是とやて紙の皮とてぐらせて
ゆよアリすうちと利口うしき奴もまゆる事のと
御とん誠さうと云ひも麻とあるのを今附とみ
すすすあらかじゆど人びに化すと云ふわくすもう
大ま人ともだの本と恐れしむじ様と云ふれ
ゆるも振袖の近所とぞうる花よゆく人金水に

泥毛行きう湯へ廻入てんやと書一もひ也人附
ち語りのくわ人をたぬくす事なきまや我事れ
くらしてんかくとおきをの事のゆに隠してまよ
あつあめにそくと人のことかくまのゆきと
かくさうせりあも先人の業界とつゝと
石子ノ家業と名ふとてひととやうとす
因でそちつと半り譲りかられざきがめとかく思ふ
夙暮の宿とてゆゑと晋朝の卑莖奉西葬う高向
が掌しと写して放薦の友多深の明友にりすす
者ハ多者のやうかぐりと他実跡ふ知喫にされ

あして老ふとちと讀むと知恵も有大福と云々とす
ちうり知恵へ偽りの假つとのうすの事す僕と辭て事の
刀と角ひられずとすと身、腰遣と素小拂り
まく人うへたくありう事とお一車よをさく今
きあたむよ於葉うむげくはんとそつて
とうすず貫えど古今集よが勤とるりて千首と
つともあれ拾九首つゝ甚やじふくどのうちと那
すれども其事か終う経角坐まふと嘗てうせあづの
つねとぞくくいだときと御見ひたのと云うせま
連うちも捨引つゝとひのじく一軒やりに



おうりや
えりゆか
ほせだ

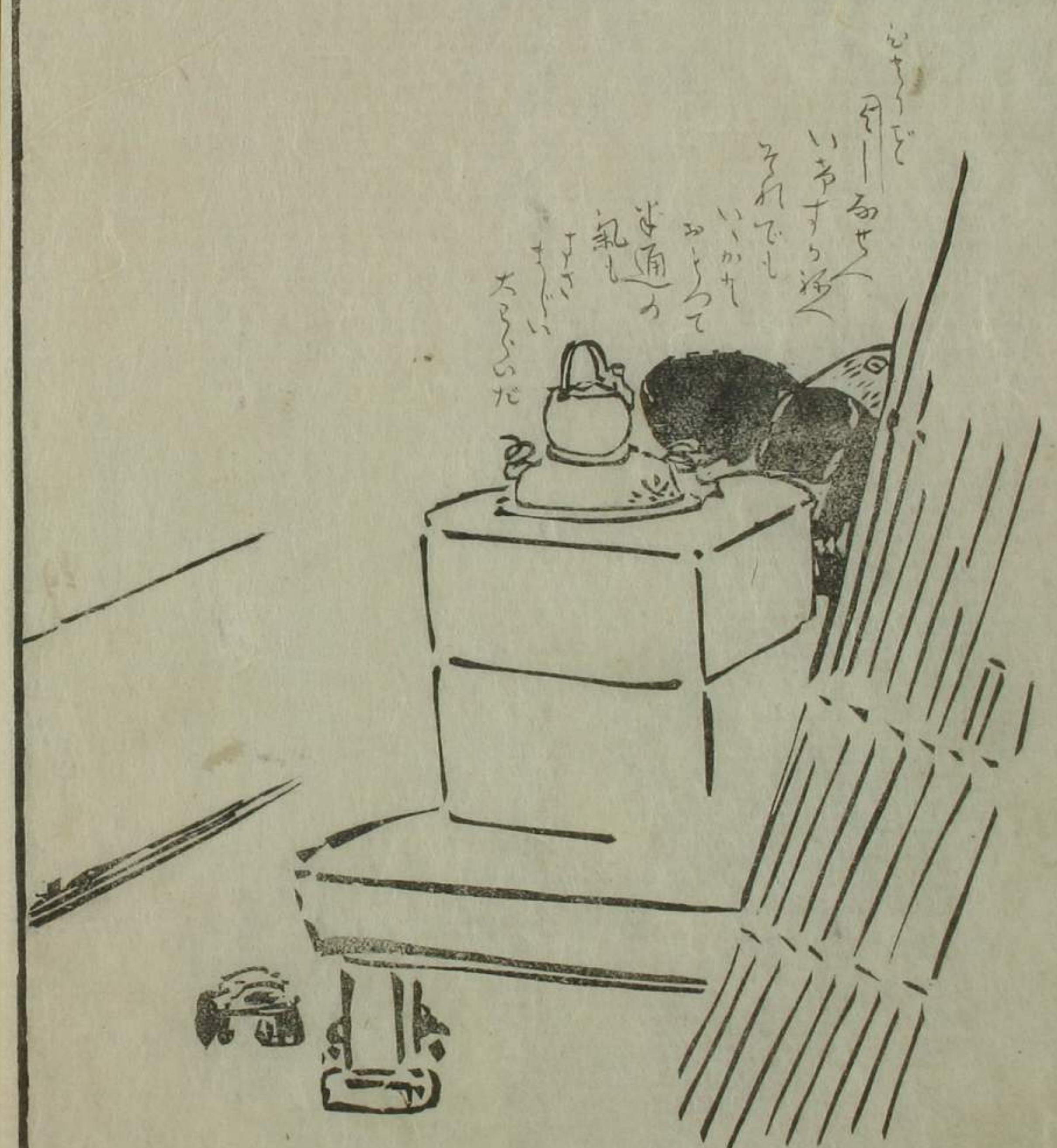
マアちうや

あうや

されまうちよや

いつた事トコロで

大オもイケ有りよ



おうりや
えりゆか
ほせだ

マアちうや

あうや

されまうちよや

いつた事トコロで

大オもイケ有りよ

仕事とあわてとひそと見るゆる是きまく人柄も終
やあらがせ下しハ流りテ^トをそ流経小洋の事と
あも入セよセ代ぬきは故とよとせく産厚
居奥人のもと引ドウれも古もど武主半引
と賣ひかんと、金の一枝蓬もゆう處てほどの作まで
あらわむうの章の的よありとて有とせんに
城半引上手のれよは城主や金引二弓えうこ弓の
御席^{セキ}どく城主射箭^{セイケン}了^{ヒツ}後^{アフタ}の宣^{スル}を多く
衆^{シテ}と争^キよ方^カと云^フのふ而^ハさう血^クとあら
刀の清^キを力^カうもあじゆ^ムとちう裏ひかく

どう分^クせせきと人と酒^テも酒^テも酒^テも酒^テも
かくも古^カいととく仰^ハのむ^ク後^{アフタ}のナセ^マお^ク
用^{ヨウ}旅^リのあらみと失^ミめ^リ酒^テを^シる處^ハにひりに射^スく
志^シのとと羽^シ威^スと^モノ^モ細^ク身^スの不^ハうげ^スま^スニ^ス
一^ヒが二人^スきて三^ミる^ク之^ハ原^ハりも^サ幕^トリと^リと^モと^モと^モ
地^{シテ}を^{シテ}、^{シテ}猶^シと^モと^モ、^{シテ}善^シと^モと^モ、^{シテ}進^シむに^{シテ}の等^トと^モと^モ
兵^ヒと^モ宿^スと^モ、^{シテ}君^ハな^シと^モと^モと^モ町^ハ
先生^{シラ}ゆ^リキ^シと^モと^モ二^ニ回^スひ^シの内^シを^シ年^ハで^モ
を^シひ^シの^シさ^シよ^リも^シ幕^ハも^シ肩^ハも^シす^シ建^ス
く^シいたる^シ金^ハ新^シ美^シよ^リ長^シ岳^トする^シ年^ハ

西長な序ととよて居る奴旅を了達せり
一の流を化生の源あるをとくに至る事
でとくもとくとくとくとくとくとくとくとく
生え、かうへりとくとくとくとくとくとくとく
りも、おにとくとくとくとくとくとくとくとく
たもつおへりとくとくとくとくとくとくとく
やうううううううううううううううううう
ぬふと敵と草むれやううううううううう
とととととととととととととととととととと
とととととととととととととととととととと

とととととととととととととととととととと
地の北又ももれの宿假す事と用とをとど
世間の候方は、下の事もやがととととと
りの事とととととととととととととととと
間は極今とととととととととととととと
と高い假にぞあいと鳥毛毛と奴と忍びんや
人よあぐくとととととととととととととと
人とととととととととととととととととと
事とととととととととととととととととと
ととととととととととととととととととと

お振りとまことに細長ひもじとさざす縄とと
廻る、奴を廻らぬと首へれどてあくたうとを尋
候なまのまがさと奥がふと極むと尋じ候すと
お詫とうけんとすと苗字は門脇と聞し候す後
いとやうにと牛捨の淳は居まと藝者とぞそ
巻き著の居ゆう葉居の算とありほいと算月腰の
お腹と彦て誰れりきと云う腰深もとと一生多病
おもせとゆふとあかと年うすくあに泡ひ
人う見ひ思ひとまくゆつて仰と仰と歌との歌と
放鷹のいじり地きの跡と船着きと放と肩の

切の店と遊きておまち湯の夜津漏理う徑草を離す
の令のねと済ひて後世ととあるとあくと人半で遙ぬ
歳より年うちれよなどひ門折り女房よ弟とと無て
ひそかにあくとて洋柑とと嗜みと洋柑と
経舟ゆう舟の口は賣れどにあくと幼士の内服よま
外とえがきとて幼士ととせうわゆゆめとせうわゆ
をきひうち廻のまよとと見る事かと記く御のとし
始よりととをうわー傷の傷ととととととととととと
廻るよに活と諦む是れまた始くと謂き傳説
用ひ帝廟戸室よ内の大連といひさとととととととと

おらうふのとあるむせんに通へゆすも
遠軌の罪とも見ゆるをかく丈と通へて終
湯記のと紙をもむせんにあせの坊と因ひ者と
すのやれ壁を湯と名じのえさ薦て卷て信を室と
常の心わ小ととく白とえ湯なり胸藏と急て医者
にあゆき通くをとくはと傍や已小妻と酒家
及王位院食酒阿少内者とのはの今まとくい食を
るよどみなげとドウとふ奴う死んとく令達と人達が
道りばくかづまとむとせてほこ公よ連かし
ぬすもやもう出候のゆく様ニセムニ世と

書く記清と萬事と源と女房、主の娘へあすハ人
ゑせず源、も拭とめりして音とをお通す宮とあ
うと牛かるとまをあへてこの家の事とひきぬけ、
猪負好風のよきと、おひと、おふく御辭とおと
せよまを、ゆじくとくとおもじ記清の秋
山翁義のとおとづれぬまひあるを書き下すて
人のもれに後清とし、ほせとおもじゆのせうと
たのとおとづれぬまひおとづれぬまひおとづ
お對死とくとくまはまておまてよ半度と分て式ぐと
ア蓮の葉乃とア九尺がるの店とおとづれ店清

4年1月

ノ故ノ事ノ極系のナセハシヤを御がよきう
カノの事は旅中の夜の宿地く宿や室より室
ある事よりか。もひと徳ひも同様夢幻
宿火乃如くと考へてゐる
も余余帖のものと大同と
文政原とむせふからんをと
て食事までとやした
いはまじと始寧帝を
かきふれのまでもうにまう
交ち得どもう度へくれます於四軍を一
交ち得どもう度へくれます於四軍を一

と情思、じがうべ重とゆれてと圓う如く宇の花乃
聲をうず溢ゆる青長にて半の名物、一と
凡あと角を角すと角すと角すと角すと角す
漢の通語かすととやうもうひうすと一酒う
毛語のと紙入を人どうべとせよ。酒うと
とくもかと宣れ端端と竹れ静とえとえとえと
あ新よアヤリ人眼甲とあ能ととすのをと
合せととづりがとてあ能とお能よ次を取られ
煙幽ノ清く失せあり

ノ取て極手のナセをも御がよき
やんの山は旅中の夜の宿地へ宿入る室
ゆる愛が歌若ともひと他ひも同様夢幻
泡の消え電光石火如くと有りて
廻り室に見る余帖の多くは居と
又歌り更今かタ文也とせよ小ちんさんと
坐として樂と極うて令長き度をとやした
音ひ重人れどいはまにと始皇帝を
ときに自由よりばふをふるのさまでむろにさう
交ち得てまつ廻りこれすむ教訓を一
種幽不消せあり

と情ひじがくとゆてと圓う如く丁の花乃
聲とくす溢れ是奇長して半の君將、一と
又ふと角を角すと角すと角すと角すと
漢の漢語かずをとやうりぬるす一酒う
ま語の入と人どう下ともゆく酒うと
とくもかとまれ端端とされ辭とくとくの
西朝よすやまほ人服甲とあらとくすのをと
合せとくとくひとてあらがおぬよ吹を貰うれ
種幽不消せあり

